
それなりに上手くいっていた人生でした。

怠けMONO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それなりに上手くいっていた人生でした。

【Nコード】

N1159Y

【作者名】

怠けMONO

【あらすじ】

目を覚ますと、そこには男の娘がいました。

それなりに満足していた人生をやり直すことになった主人公が、新しい人生を楽しく過ごそうと頑張ります。

* 原作を知らずに、衝動的に書き始めた駄文です。

第一話（前書き）

どうも初めまして、駄文ですがよろしくお願ひします。

第一話

それなりに上手くいっていた人生でした。

わりと勉強ができ、平均より高い運動能力をもち、多くの友達ができ、楽しい人生でした。

大学に進学し、やっと明日から20歳になると感傷に浸りながら眠りについたはずでした。

・・・ここはどこですか？

目を覚ますと、体は動かない、頭は熱くて痛い、声は出ない、ないない尽くしでした。

それでもあまりの辛さにジタバタしていると、扉の開く音と誰かの足音が聞こえました。

音のした方を霞んだ視界に収めると、そこには長い黒髪の美人らしき人が見えました。

あなたは？と声を発しようにも声が出ず、近寄ってきた人に抱きかえられると疑問に思ったことがあります。

抱きかかえられる？

20にもなる大人が？

そんな疑問を余所に、その女性は私を抱きかかえるなり車に乗せ、近くの病院へと直行し、私は流されるまま待合室に座り、お医者様に見てもらい、薬をもらって再び家に帰って、寝かせられました。

その間、女性は私に向かって「大丈夫？」「どこが悪いか言える？」など心配そうに尋ねてきましたが、私の熟練のその場に合わせて流す技術により問題ありませんでした。

その後、お粥を食べさせてもらい、薬を飲んで寝てしまいました。

次の日、カーテンの隙間から日差しが差し込み、スズメが鳴いており、まさに絵に描いたようないい天気だなあと思いながら目を覚ましました。

薬が効いたようで随分楽になり、周りのことをきちんと認識できるようになりました。

私はふと目についた鏡を這いつくばって取って見ると、そこには白髪が肩ぐらいにまで伸びた目の赤い男の娘が映っていました。

・・・誰やねん

いやあ、どうやら私はまだ夢の中のようです。

ええ、あんな男の娘なんているはずがない。まして自分は自他ともに認める三枚目でしたので、そんなはずがあつてたまるものか！

こついつ時はお約束通り、寝れば夢から覚めるのです！

ほっぺは抓りませんよ。現実逃避ではないのです！

これは戦略的撤退なのです！　　？

しかし、あんなのが実際にいたらホルモンバランスが相当崩壊しているんでしょうね、あはははは。

と再びベッドに入り、目を覚まそうとした時、部屋の外から足音が近づいてきました。その誰かは部屋の扉を開けるなり、

「あかね緋音大丈夫？」

「あかね緋音生きてるか？」

とこちらに尋ねてきました。

ええい！邪魔するでないわあー！

私は大人へと変身する（20歳になる）ために起きるんじゃない！

心の中でシャウトしながら、もう一度寝ようと試みました。

「起きられるようになったか？」

「よかった、昨日急に熱を出したから心配したのよ？せつかくの3歳の誕生日だったのに、残念ね。」

へえー、そうなんですか。それじゃ、って乱暴に撫でないで下さいよ！痛いじゃないですか！

そんな態度が顔にでていたのか男の方は苦笑しながら手を引込め、女性と一緒に部屋を出ていこうとします。

「じゃあ、後でお粥とお薬持ってくるわね。」

はいはいわかりましたよ、お母様。

そして、二人が部屋から出ていき、扉が閉まると私は天井を仰ぎ、理解してしまったために自然とため息を吐いてしまいました。

現実か・・・orz

第一話（後書き）

ありがとうございました。

第二話（前書き）

少し修正しました。

第二話

どうも！白峰緋音でツス！

いやあ〜あれからは大変でしたよ。

（認めたくない）現状理解から始まり、この体に残っていた記憶を思い出しながら、新しい幼児生活を何とか過ごしています。

アルビノというハンデを抱えていましたが、そこは元大人の精神のため、外にでて同い年のちびっ子たちと遊びたいと言うこともなく、物静かに日陰で読書を嗜んでいました。

外に出るときは、サングラス（基本的に室内でもつけている）をかけ、日傘を差し、肌を出さないようにしたりするのは大変でしたが、特に問題はありませんでした。

服を買いに出た時に、両親が見た目女の子の私に「似合うから！」と悪ふざけで買ってきたロリータ系の服を強制着用させ、あまりのはまりっぷりに記念撮影会をされたり……………

日本なのに和を感じない西洋の街と非常識さに内心で愚痴を吐いたり……………

休日に両親に連れられて外出した時に、お父さんの知り合いに出会い。

その知り合いの連れていた息子に「男女」や「白くて変な奴」とか

らかわれてちよっかいを出されると、両親がキレた上にその子の親まで怒り出し、怒りすぎじゃないかと思っただけがその子を弁護する羽目になったりー（その子とは親友になりました）……………

親友と一緒に遊んでいて、私の体質とかを話したら「俺がお前を守る！」と言われたので、「男（大人）が男（子供）に守られるのもなあ」と呟いたらとてもビックリされたり……………

問題はありませんでした！

それにしても、不思議の塊みたいな私が言うのもなんですが、日本ってこんなに不思議なところでしたっけ？

ドでかい西洋を思わせる街のあっちこっちを見れば髪の色がレッド、ピンク、ブルー、ブラウン、ゴールドなどの色彩豊かな人々が歩いています。

さらには、目立つ恰好の私（散策中）に絡んできた不良をあつという間に鎮圧するダンディーー（ですめがね？とか恐れられています）に出会ったり、迷って辿り着いた女子中に近いコンビニで、古い制服を着た生気の薄そうな女の子を見かけたり、ギネスをはるかに超えるであろうでっかい木（ばんとうとかいうらしいです）に図書館とかあったりと前世一（？）とのあまりの違いに自分が変なのかと悩んだりもしました。

そこで色々と気心の知れた心友一（レベルアップ！）に話してみると、顔が笑っているのですが、微妙に汗をかいた表情で、

「だ、大丈夫だよ！」

と何が大丈夫なのか全く分かりませんが、その必死さに免じて今回は見逃してあげましょう。

・・・そのため息は何ですか？

第二話（後書き）

ありがとうございました。

第三話（前書き）

少し加筆修正しました。

第三話

私も今日から小学生！

そして、今日は入学式！

両親がカメラの準備に勤しみ、楽しみにしていました。が、私は（この世界での）今までの経験からして面倒なことになりそうだなと考えていました。

小学生をやり直すこと自体は懐かしくてちょっと楽しみにしているんですが、子供は純粹で残酷ですからね。……

晴れ晴れしい日なのにこれ以上は暗いことを考えるのはやめようと、出入口近くで式場となるでっかい講堂内を見渡します。

小っちゃい子が溢れかえり、ふざけて遊び、泣き喚き、先生方が大きな声でなんとかまとめようとしています。がなかなか思うようにいってません。

うん、カオスですね！

この中に混じっていかなきゃと思うと、ため息がでそうですが我慢我慢。

さっさと自分の席を見つけて座りましょう。

すると隣からため息が聞こえてきました。

おやおや、そんな人生に疲れたおっさんがするようなため息をするのはどこの誰ぞ、と興味を持ってそちらを見ます。そこには……

人生に疲れた雰囲気的美少女がおりました。

すごいですね、傍から見ているとすぐわかるくらい疲れていますよこの少女。

眼鏡をかけており、長い赤髪を後ろで括り、これから私が入学する麻帆良小学校の新生に配られた花飾りを胸に着けた少女は、どんよりって表現が相応しいくらい沈んでいました。

そのまま観察していると、その少女がこちらの視線に気づきました。

「何だよ、人のことじろじろ見て？」

おおっと、なんかピリピリしてますよこの少女。

とりあえず、あたりさわりのない挨拶でもしましょう。

初めまして、こんにちは。

いや、妙に疲れたため息をつくのは誰だと思って見たら、あなた（美少女）の雰囲気か浮いていたので・・・

「誰が美少女だ！　って、そんなことより、わ、私って変なのか？」

あれ？　なんか怒った上に、ビクビクしだしちゃいましたよ？

これは不味い！

何が不味いって私は体は男の娘ですが、精神は元大人！　重要

そう、つまり私は紳士（笑）！　紳士（笑）であるべきなのです！

女の子を悲しませてはいけないのです！

いやいや、何をおっしゃいますかウサギさん。

あなたのようなかわいい子（美少女）は中々いませんよ？（あれ？

そういやこの土地美人多くね？）

あなたが変わら、こんな格好の私なんてそれ以上に変です！

もっと自分に自信を持ってください、ね？（サングラスを外して、スマイル）

「あ、ああ。ありがとう・・・／／／」

ふう、どうやらごまかせたようですね。 サングラスが怖かったんですかね？

なんか顔がちょっと赤くなっちゃいましたけど、周りの男子も何人か赤くなってますけど、無問題！

「（こいつならもしかして・・・）な、なあ、よかったら式の後で話さないか？」

もちろんですとも！ 私でよければ何でも聞きますよ。

あ、でも私の友達も一緒にいいですか？ 今ここにいませんけど、後で合流するんです。

「ん・・・、まあ、いいよ。」

よし、ちょっと不安そうですが大丈夫でしょう。

さて、6〜7割ほど子供が座ってそろそろ式も始まりそうですし、静かにきちんと座っていきましょうか。

早く終わらないかな。

さすがに、ぬらりひょん（学園長の挨拶時に登場）が実在したのには驚きを隠せませんでした。

後、今日から幼女に懐かれました。

第三話（後書き）

ありがとうございました。

第四話（前書き）

加筆修正しました。

第四話

どうも、美少女と出会った緋音です。

例の少女（長谷川千雨ちゃんという名前らしいです）がお友達になつてから、一年が経ちました。

あの式の後は、私が男だとわかると突然キレだしたことを除けば、順調に仲良くなれました。

我が心友しよーくんとも問題なく仲良くなれましたが、どうも他の子達とは話が合わず、私たちは三人組で行動することが多かったです。

（他の世界からきた）私の常識が間違っているのかと思えば、（この世界で生まれた）千雨ちゃんが私と同じような常識を持っていたんですよね〜。

そのせいで今まで周りとは何度も衝突しており、家族も分かってくれなかったそうです。

千雨ちゃんは話の通じる相手が見つかって嬉しそうでした。

うんうん、やっぱり女の子には笑顔ですよね！

小学生にはなつたものの、今までと同じく、あまり外にでられない上に激しく動くことができないため、屋内で大人しく過ごすが多かったです。

周りに馴染んでるしよーくんも、よく私たちに付き合ってくれました。

しよーくんは優しいな。

行事もほとんど参加できませんでしたが、思い返せばなかなか濃い出来事が多いですねえ……………

懸念していたように、私の容姿や格好に対するいじめが起きて、しよーくんや千雨ちゃんにも迷惑や心配をかけてしまいました。

黙っていたらその内飽きるだろうと考え、無視していると、傘やサングラスを取られてしまい、さすがに私も焦ります。

その上、UV対策なしに外に引つ張り出されそうになった時は、さすがに泣きそうになりましたね……オソトコワイオヒサマコワイ……………

目を強い光から守るために瞑り、待っていれば返してくれるかなあと日陰で淡く期待して座っていると、それを知ったしよーくんが取り返してくれてとても助かりました。

・・・翌日、いじめっ子に震えながら謝られたのでとても驚きました。

しよーくん、何したの!?

私が千雨ちゃんとしよーくんを家に招いたときは、すっかり(私の)コスプレにはまっていた両親が、千雨ちゃんを気に入り、何故か緊急コスプレ写真撮影会が開催されてしまいました。

ちなみに、それをいち早く察した我が心友は、私と千雨ちゃんを餌に逃げ出しました。

もちろん見捨てた仕返しはしましたよ?

私と千雨ちゃんが、麻帆良は変だねと話していると、千雨ちゃんはストレスを吐き出す科の如く、嬉しそうに話していましたが、隣で聞いていたしよーくんがハラハラしながら冷汗を流していたり、何か言いたそうにしていました。

うーん、悩みがあるなら聞いてあげたいんですが、教えてくれないもんなあ・・・

体育祭が行われた時は参加できずに影で応援していました。

皆が外で一斉懸命動き回っている中、日傘などを装備した私はかなり浮いており、上級生にもジロジロ見られて動物園の動物になった気分でした。

全く気持ちよくありませんね。

麻帆良祭では特に催し物をするのではなく遊ぶことになりました。やる気があれば稼げるとはいえ、さすがに小学生の一年生が稼ぐのは難しい上に、遊ぶほうがいいですよね。

この祭りは皆は素直に楽しめるかもしれませんが、私と千雨ちゃんはそのすごく変な気持ちで過ごしていました。

中学生までもが金稼ぎをし、妙に高い技術が溢れており、外から来たはずの人も異常を異常と違ってませんしね。

何かしら事故とか起こってもアトラクションのような反応しかされません。

以前までなら、これがこの世界の普通なのだろうとスルーしていましたが、千雨ちゃんと常識を共有するようになって異常だと思うようになってきました。

人が密集していて危なかったので、人の少なそうな所で適当においしいものを食べ、ぶらぶら回っていました。

二人で！

デート（笑）ですね！

しよーくんは他の子に誘われていましたが、途中から私たちと合流しました。

何故か不機嫌そうでしたね？

バレンタインになると、しよーくんが何人かの女の子（見た感じそこそこかわいい）にチョコをもらい、何人かの男の子に恨めしそうに見られていたのを、ニヤニヤしながら眺めていました。

戻ってきたしよーくんは特に嬉しそうではなく、私たち（見た目はさっきの子たちよりかわいい）を見てため息を吐いていました。

私たちからも欲しいか聞いたら「いらねえよ！」と否定されました。

時には、上級生の新聞部が行った校内ランキングの美少女部門（低学年の部）の上位に私の名前があると聞いて、いくら女の子に見られることに慣れてきた私でも久々に言葉がでなくなってしまうし

た。

千雨ちゃんは（私より下だったため）少し不機嫌になって私を殴り、しよーくんは思いつきり笑ったので私が殴りました。

さらに一、二年が経過したあるいい天気（曇り）の昼下がり、私はふと言葉にしました。

そっだ、図書館島に行こう。

その言葉を聞いた二人の反応は、

「あそこか、なんか凄いらしいからな。行ってみようぜ！」

としよーくんが乗ってきたのに対し、

「罨とかあるんだろ？ 危ないから止めないか？」

千雨ちゃんはあまり乗り気ではないようです。嫌そうです。

今までは用事がなかったですし、罨が仕掛けられたダンジョンがあるような変な所に行きたくなかったので敬遠していました。

しかし、地上部分は安全でまともだという話を聞きいたので、何か新しい刺激が欲しいと思っていたので行きたくなくなりました。

千雨ちゃんを説得し、地下には絶対に行かないという約束の下、放課後に図書館島散策ツアーに行くことが決定しました。

何か新しい出会いがあるといいですね〜

第四話（後書き）

ありがとうございました。

番外編 1 (前書き)

入学式後の出来事です。

番外編 1

・入学式の後

緋音は式の時に出会った女の子　長谷川千雨を外の人に巻き込まれない位置に少しだけ待ってもらい、翔を呼びに行った。
向こうも緋音を探していたようで、数分もいらずにすぐに見つかり、翔を千雨のことを軽く話しながら案内する。

「千雨ちゃん、お待ちせしました。あ、こいつは私の心友の宮部翔みやべです。」

「俺のことは翔って呼んでくれたらいいから、よろしく。心友って言うより幼馴染だな。」

「（親友ねえ・・・）初めまして、長谷川千雨です。」

男の子2人はにこやかに挨拶をし、女の子は少し愛想に欠けるが挨拶を返す。

小学校に制服はなく、見た目はサングラスをかけた少し変な女の子の緋音と、周りにいる新入生よりも落ち着いている男の子の組み合わせにちょっと疑問を持った千雨が何気なく疑問を口に出した。

「幼馴染とはいえ、男と女で仲がいいんだな？」

「あはは、何言ってるんですか千雨ちゃん。私、男ですよ？」

そついうと千雨ちゃんがビックリし、少し悲しそうになって「こいつもか・・・」とつぶやく。

紹介された方の翔も笑顔を引き攣らせ、「ああ、またか。」みたいな顔をした。

どうやら今までも何度かあったようで小学生に思えない程達観して

いる。

それもそうだろう、緋音に（親たちにひどく怒られたことから）助けられてからは緋音を外に連れ出したり、室内で遊んだりと一緒にいる時間が増えたことで、その機会は多くあっただろう。

「や、やっと私の話を聞いてくれて、普通に（髪白くて、目が赤いけど）仲良くなれそうな奴に会えたかもと思ったのに……」
「？ 千雨ちゃん、どうし……」

緋音（男の娘）がどうしたのかと近づくが、女の子はビンタをかましながら叫ぶ。

「お前もかー！」
「（バチーン！）へぶっ！ ち、千雨ちゃん？ ちよっ、千雨ちゃん！？」

千雨は泣きながらどこかへと走って行き、緋音は追いかける。
翔はいろんな意味で取り残されてポツーンと立っていた。
ハッと気づいたころには、二人を見失ってしまう。

「教室移動なのにどうするんだよ……」

とりあえず、その場から少し離れて先生に見つからないようにする。心配しながらも緋音たちを追いかけず、教室に先に行くこともせず、待つことを選んだ彼は何気に優しい。

しばらく待っていると、二人が走り去った方向から手をつないで駆け寄ってきた。

ちなみに、千雨が頬を赤くして嬉し恥ずかしそうにしていたのを見

た翔が、笑顔の心友を思わずぶん殴ったのは仕方のないことだろう。

その後、急いで三人ともそれぞれの教室へと向かい、先生に心配させることとなるのは蛇足である。

第五話（前書き）

作者は原作を知らないので、捏造しまくるでしょうが勘弁してください。

第五話

図書館島。

それは麻帆良湖に浮かぶ（浮かんでないよね？）世界最大規模の巨大図書館。

2度の大戦の戦火をさけるため、世界中から様々な貴重な本が集められてきたそうです。

蔵書の増加に伴い地下に向かって増改築が繰り返されたために現在では全貌を知るものはいらっしゃらないそうで、その実態を調査する中・高・大合同サークル「図書館探検部」なる部（地下に罫を仕掛けていることを考えると、どえらいハードな部活動ですね？逆に迷惑なのでは？）も存在していると聞きました。

（wiki参照）

・・・なんでやねん。

おおっと、すみません。あまりの出鱈目さに意識が飛んじやってましたよ。

爆とか落とされるような国になんで世界中の貴重な本が集まるんでしょーねー？

となりで千雨ちゃんも一緒に突っ込んでますよ！

・・・しょーくんは笑ってますけど、冷や汗でてません？

地上部分は安全らしい（図書館に安全じゃないところがあるのがツッコミどころですよね？）ので、見て回りましょう。

ほらほら、千雨ちゃんもしょーくんも行きますよー！

いやー、これだけ広くて高い建物の地上部分にあるだけでもものすごい蔵書量ですね？

大きな本棚が整列して立ち並んでいます、本の森とでも表現できそうな程広い上に多いですね。

迷子とかでないのかな？

どうせだから皆で手を繋いでいきますか？

「いや、俺はいいよ。千雨ちゃんと繋いだら？」

「ばっ、馬鹿言っんじゃねえよ！手なんか繋がなくても大丈夫だよー」

あら？そつですか？残念ですね。

最近片手（日傘を持たない方）がさみしいな、と思っていると、

おどおどした様子が庇護欲をそそる、前髪で目が隠れた少女を発見しました。

おや、これはいけませんね。

紳士（笑）たるもの困った女性には手を差し伸べねば！

ということ、さっそくアプローチ開始です！

「（また新しいフラグか？）」

「（むっ……。いや待て、そう、緋音は人助けが好きなんだ。だから問題ない。あれ？じゃあ私も……。）」

後ろの呆れと怒りと悲しそうな空気はスルーして、

こんにちは御嬢さん。何かお困りですか？私でよければ喜んで手を貸しますよ〜。

私に気づいた少女はビクツと小動物的^{かわいいなあ}反応をしながらもこちらに向き、「ひうつつ」っと鳴いて一歩下がりました。

あれ？ おかしいな？

目から何か熱いモノがでてきそうです。私何かしましたか？

その反応は悲しくなるんですけど……（少しいじめたくなつたのは気のせいです！）

「え……っあ、あの、すみません。その、ちょっと（サングラスとか白い髪とかに）びっくりして、あ、その……」

……ぐはっ

クツ、こんなところでこんなモノ（皆で協力して守っていくべきモノ）に出会うとは……

人生何があるか分かりませんね。

後ろの怖い視線には気づきません。ええ、ス「おい。」ルー不可能でした。

「結局どうだったんだ？ その子迷子なのか？」（しょーくんナイス！）

今聞くところですよ。

ええ、だから千雨ちゃん？ その固く握った拳をひらいてください。

「なるほど、ビンタがいいのか。」

断定しないで！

まず叩くことを選択「あの……」あ、放置してすみません。

それであなたはど……

我ながらいい反応ができたと思います。

私たちを横切った台車が倒れてきて、その上に積みまわっていた段ボールの山がこちらに倒れてきたんです。（反対側からふざけて走っていた男子がぶつかつたのと、それに驚いた運搬者が台車をつかんだまま横に倒れたからだそうです。ちなみにその人たちは無傷。）

近くにいた千雨ちゃんをしょーくんの方に突き飛ばし、ついで迷子（？）の女の子をを反対方向に勢いよく突き飛ばし、逃げ遅れた私は腕で頭を庇うようにして衝撃に備えました。

重そうな荷物ですが、頭を守れば死にはしないでしよう。

しかし、こんなアクシデントは今までなかったのでついつい思っちゃいますね。

誰か助けしてくれるとうれしいな〜・・・

・・・（フワッ）・・・ドサドサドサつと物音がして、待つこと数秒・・・あれ？ 痛くない？

目を開けてみれば迷子（？）の子は目を回し、千雨ちゃんにこちらを見えないように抱いて距離をとっていたしよーくんは目を見開いて驚愕の表情を浮かべ、台車を押していた人は目を覆っており、知らない男の子が台車のそばで転んで痛そうにしていました。

あれ？ 私って運がよかったんだなー、っと思ってしょーくんの方を向いたら、

「千雨ちゃん、悪いけどあの子見ていてもらっていいかな？ ちよつと緋音保健室につれていくから。ほら、いくぞー！」

「わ、わかった。」

冷静なようで焦りながら、しょーくんは私たちに指示をだし、私の腕をつかんで駆け出しました。

ちよ、しょーくんストップ、ストップ！携帯取り出して話始めんな！せ、せめて傘！傘だけでもないとわたs・・・ぎゃ　！！！！！！！！

・・・もう少しで私はUV対策なしで晴れてきた外に連れ出されるところでした・・・オソトコワイオヒサマコワイ（がくがくぶるぶる）・・・

「・・・あ、師匠ですか？問題が発生したので至急相談したいんで

すが
・
・
・
「

第五話（後書き）

ありがとうございました。

第六話（前書き）

ちよつと無理やりな感じですが、独自路線でいってみようと考えています。

主人公はちよつかりチートでした。

第六話

「ふおっふおっふお、君が魔法を使ったからじゃよ。」

麻帆良学園本校女子中等学校の学園長室、私はそこにいます。

私の他には、目の前に学園長がらひひちゃんが机に座っており、隣でしょーくんの師匠だとかいう人が報告して、私の側にこちらをちらちら見ているしょーくんがいます。

あの後、しょーくん（あの後、肉体言語でOHANASHIしました）の師匠（高校の先生らしいです）と合流し、この場所まで連れられてこられました。

悪いことなんてしてないのに、悪いことしたみたいでびくびくしていましたが、とりあえず聞いてみました。

あの、なんで私はここに連れてこられたんですか？

笑顔です。ひきつつっているかもしれませんがとりあえず笑顔で尋ねます。

それに対する返答が、最初の言葉でした。

本来なら、この人頭大丈夫かな？とか思うんですが、私は自分でも理解できていない不思議な体験をとっくの昔に済ませていましたし、この土地が変なのはわかっていたので、すんなりと受け入れました。

ええ、めらりひょん学園長がいうんだから説得力ありますよね！

「なぜか釈然とせんが、とりあえず魔法が実在することは理解してくれたかの？」

理解しましたよー。バッチリです。

妖怪が魔法ってどうよ？とも思わないでもないですが、現状把握です。

でも、できれば実際に見てみたいんですけど？

「じゃあ俺が見せるよ。プラクテ ビギ・ナル “火よ灯れ（アールデスカット）”」

ボツ

側にいたしよーくんが伸縮できる杖を取り出し、呪文を唱えます。

おおー、火ができました！

夢がありますねー、ファンタジーですねー。

しよーくんも使えるんですか。いいな。

「ふおつふおつふお、魔法は秘匿されており、本来なら一般人には
れたら黙っていてもらうか、記憶を消させてもらっているんじゃないが・

・
・
・
」

なんか物騒な言葉が聞こえましたけど・・・ああ、私が使ったから
問題になったんですね？

・・・使ったんですか？自分じゃよくわからないんですけど？

「お主の隣にいる宮部くんが、お主が風の魔法らしきものを使った
のをちゃんと見たそうじゃ。」

そうなんですか？

私が魔法を知らないのは、しよーくんもよく知っていると思います

が？

「ああ、緋音に魔力があるのは分かってたけど、魔法を知ってるよ
うでもないからびっくりしたよ。」

ふうん。そんな簡単に使えるもんですかね？

さっき杖もって呪文唱えてましたけど？

「そこじゃ。」

へ？

「僕からみてもお主はそんなに魔法の才能があるように見えない上
に、杖のような触媒をもっているというわけでもない。なぜじゃ？」

いやいや、知らないですよ？ プロにわからないものをどう説明し
るど？

魔法、魔法ね？ 風がでたんですよ？

どうやって？ うーん？

風よ！ なぐんちゃ・・・

その日、帰宅中の生徒たちは学園長室の全窓がぶっ飛んだのを目撃した。

第六話（後書き）

ありがとうございました。

第七話（前書き）

魔法の解釈が間違っていたらすみません。

第七話

居づらいです……

ものすごく、居づらいです……

部屋の中はぐちゃぐちゃで、机や椅子はひっくり返り、壁に傷がつき、窓は大破。私以外の皆さんの恰好はよれよれで、不機嫌そうな表情を隠そうとされていますが、怒りマークがはっきり見えます。

「それで……どうやら君は風を操れるようじゃの。」

重苦しい空気の中、学園長が私に疑問、いえ事実確認をしてきました。

いえいえそんなことできるわけないじゃないですか!?

ちょっと言ってみただけです。言っただけなんですよ!

「じゃが、この現状をどう説明するのかね?」

「そうだぞ! さっきものすごい風だしたじゃねえか!? 壁に頭ぶつけてコブできたんだぞ!」

しよーくん、私に近い分すごい勢いで飛んでいきましたもんね。

ちよ、タンマ、そんなに揺すらないで下さいよ。

と、とりあえず落ち着きましょう！ ごめんなさい、だからその手を放してー！

息と服が乱れてしまったので、息を整えるのと一緒に服も直しておきます。

一息入れ、学園長たちの方をむけば、私を睨んでいるというより、観察しているようでした。

えーっと、さっきの言葉は言わない方がいいですかね？

「そうじゃな・・・（言霊？いや、それじゃと今まで何もなかったというのはいえん。無詠唱魔法だったとしても、あれだけの風を起こした後で彼の魔力が減った様子はないのう？ ふむ？）」

学園長は私の疑問に答えながらも、別のことに意識を向け始めました。

うわー、どうしましょ？ 向こうで話し合い始めちゃいました。

私っていつ爆発するかわからない爆弾みたいですね？

あははは・・・

私は学園長たちの話に加わることができませんので、しばらく結論がでるのを待つしかないんでしょうね。

怒っていたしよーくんはコブが痛むのか、不機嫌そうにその場所を抑えて静かにしています。

うーん、それにしても部屋の状態が酷いですね？

こういうのをパパッと魔法で直せないんでしょうか？

しよーくん？ お掃除とか物の元通りにする魔法とかないんですか？

「いや？ あるとしても俺はしらねえ。だいたい俺の習っている一般的な魔法ってのは、杖とかの触媒を通して魔力を周りの精霊に渡して、詠唱することで魔法を発動させてるんだよ。火とか水と光とか。」

何気に手間がかかりますね。詠唱は知らない言語でしたし。

それにしても、精霊がいるんですね。

魔法は自力じゃなくて、精霊にこちらをお願いを聞かせて発動してもらおう……ふむ？

わざわざそんなこと（詠唱や発動体の準備）しなくても頼めばいいんじゃないんですか？

例えば、精霊さんお水くださいっ……

放課後遅くに帰宅しようとしていた学生たちは、学園長室の窓から大量の水が流れ出るのを目撃した。

第七話（後書き）

ありがとうございました。

第八話（前書き）

相変わらず短いですが、とりあえず載せます。

第八話

放課後の学園長室、そこはもはや見る影もなくなりつつあり、ゲシヤグシヤのビチヨビチヨでした。

空気が再び悪くなり、心なしか先ほどより大きな怒りマークがみえます。

「……………ほう、精霊にお願いしたとな？」

はい、そうなんです……………出来心だったんです……………

だから、その……………えっと……………

……………許して？

(ゴロン！)(あでっ！？) しょーくん、痛いですよ？

「反省しろ。」

「ごめんなさい！」

「学園長、もしかしたら白峰君は精霊に好かれているのではないでしようか？それもとてつもなく。」

「うむ。そう考えた方がいいかもしれんの。(しかし、本当にどうしようかの？あやつに知られると面倒じゃし……いや、いっそ押し付けるのもありかもしれん。)」

「とりあえず、今日はいったん帰しましょう。風邪を引かせても問題ですし……なんでしたら、翔と一緒に私が様子をみますよ?」

え？ い、いいんですか？ 私、迷惑ばかりかけましたけど？

そして学園長！ 何やら妙なことを考えていませんか！？

「はは、確かに大人げなく怒ったりもしたけど……困っている生徒を助けるのが仕事柄だからね。気にしないでいいよ。」

「ま、お前なら俺もいいよ。ただし、もうちょっと気をつけろよ。」

あ、ありがとうございます！

しよーくんもありがとうー！さすが我が心友だね！

「ふおつふおつふお、君たちは早く帰りなさい。ああ、保健室に寄ってタオルを借りるといい。白峰君、くれぐれも魔法とかについて誰かに話さないようにの？」

はい、ありがとうございます。それじゃあ失礼します。

「失礼します。」

そうして、やっと私たちは帰宅しました。

翌日、心配した千雨ちゃんに怒られました・・・

「聞いてんのかー！」

はいー！聞いてますー！

第八話（後書き）

ありがとうございました。

第九話

どうにかこうにか千雨ちゃんを落ち着かせ、私は気づきました。

そう、千雨ちゃんもこの土地がおかしいことに気づいていて、周りのみんなと意見が衝突しがちだったんですね。

私たちがいたから結構ましになりましたけど、ひとりだったら人間不信になっていたでしょうね？

うわー、皆から嘔吐きとか言われると思うとぞっとしますね・・・

しかも自分も周りも子供ですからね・・・良くも悪くも

気づいてしまったからには、その不安を取り除いてあげたい。

子供を守るのは大人（笑）の役目ですからね！

とりあえず、教えるかどうかをししょー（しょーくんの師匠 森^{もり}さと
里 景一^{けいいち}先生、バイクが趣味 のこと。私もそう呼ぶことにしました。）に相談することにしました。

ししょー、実は私の友達に昔から麻帆良が変だっけ気づいてる子が一人いるんですけど、魔法のこと話しちゃだめですか？

「何だっけ？・・・ああ、翔が話してた子だね？ 翔？ その子

に認識阻害はやっぱり効いていないのかい？」

「はい。前にも言いましたが千雨には効果がないみたいでした。」

あら、先にそういう話してたんですね？

「うん。とりあえず、君たちがいれば大丈夫かな、と思って黙っててもらったんだ。下手に教えると色々和不味いからね。」

出来れば教えてあげたいんですけど？

千雨ちゃんは常識がしっかりしてる分、時々辛そうにしていますから・・・

「あゝ、ごめんね。気が回らなくて。君は大丈夫だったのかい？」

「そうだよな。お前大丈夫そうだから、千雨も大丈夫かと思っただぜ。」

む！ しょーくん、それはいけません！ 紳士（笑）たるもの女の子を大事にしないと！

「いや、千雨が弱み見せんのは大抵お前にだから。それに俺は男女平等だ。」

「ははははっ。うん、教えて大丈夫だよ。学園長には俺から伝えておくから、その子の不安を解消してきてあげて。」

はい！ ありがとうございます！ では早速。

千雨ちゃんに電話をかけようと思いますが止められます。

「明日にしたらどうだ？ 今からじゃ遅くなるだろうし・・・それに、お前は早くその体質？をどうにかしないとな。」

ぐっ、そうでした。 昨日は大参事でしたもんね・・・

「それじゃ、さっそく試していこうかな。 まずは魔力を操作してみようか。 本当なら、杖をもって初心者呪文を唱えて練習しているんだけど。 君の場合、魔法使いになるのが目的じゃないし、下手に呪文唱えると何が起きるかわからないもんね？」

す、すみません。

しよーくん、苦笑いしないでください、距離を取らないでください。

「いや、昨日お前のそばにいたから余計に、な？」

すみませんでした！

まあ、ぼちぼち始めましょう。 こういうのは切り替えが大事です！

魔力、魔力と。

目を閉じて、静める、鎮める、沈める。

意識を体の内側に。

周りの音が消えていき、心臓の音が聞こえ、血の巡りを感じる。

体の中心ではなく、奥へ、奥へと。

意識を、感覚を這わせて、広げて、探っていく。

・・・ある。

力を感じる。

優しく、恐ろしく、温かく、冷たい、力を感じる。

自分に、大気に、大地に、生命に。

それに触れる。

そしてそれを・・・

「……………ん……………くん……………白峰君!」「……………ね……………
かね……………緋音!」

うおっ! ど、どうしたんですか? 何か問題が!?

「いや、何だか不味い雰囲気だったんで止めさせてもらった。」

「そうそう、お前何しようとしたんだ？　すげー寒気がしたぜ・・・
こう、ヤバイって！」

いや、魔力を操るうにも感覚がわからなかったんで、集中して探っていたんです。

それで、自分だけじゃなくて、この空気中とか大地にある何かがあるか？
それだろーなと思って、こう、集めよう・・・

「か、感じただけじゃなくて？」

ええ、あとちょっとでガツと集めて取り込められそうでしたよ？

あれ？　何でそんな理解不能なものを見る目で私を見るんですか？
普通じゃないんですか？

ちよっと！　ししよー、考え込まないで！

「白峰君、君は・・・」

はい！　何でしょうか！？

「君は、魔法使いになるべきかもしれない。」

・
・
え
？

第九話（後書き）

ありがとうございました。

第十話

翌日、千雨ちゃんに放課後の時間を空けてもらい、魔法について話をすることになりました。

千雨ちゃん、実は魔法は実在したんですよ！

「あ……緋音、頭でも打ったのか？ それとも早い中二病か？
大丈夫、大丈夫だから。私はちゃんと受け止めてあげるから。
安心して……」

あれ？ 心配してくれるのはうれしいんですけど釈然としませんか？

「千雨はとりあえず落ち着いて。 緋音は端折りすぎ。 あのな？
まず……」

おっと私は放置ですか……

「……ということ、お前はちゃんと常識持った一般人なんだよ。」

「そう……か。 ……緋音たちは魔法のことは最初から知って

たのか？（私だけ仲間外れなのかな・・・？）

「あゝ・・・それなんだが、図書館島に行った時こいつ段ボールにつぶされかけただろ？あの時に緋音が魔法使ったみたいだったから連れ出して、その後俺が師匠たちと会って説明したんだよ。だからそれまでこいつはただの一般人だったよ。」

「そ・・・そうか。（ホツ）翔は違うんだな？」

「ああ、俺は最初から魔法を知ってたよ。おい、緋音。話終わってたぞ。」

（ボーツ）おおう！？終わりましたか。

それじゃあどうしましょう？皆で遊びにいきますか？

「そうだな。千雨は？」

「ん、大丈夫だ。どこ行く？」

そうして、私たちは遊びに出掛けることにしました。千雨ちゃんが元気になったようで何よりです

そして、私は昨日の会話を思い出しました。

え？ 魔法使いにですか？

「うん。 正確には自分の身を守るだけの力を持った方がいい。君は狙われやすいだろうからね。 さっきのことといい、精霊に好かれていたろうという君の体質も。」

狙われるんですか？ 黙っていればわからないんじゃない？

「いや、わかる人にはわかるだろう。 実際、学園長には君が精霊に好かれているだろうというのがバレてるし、他にも分かりそうな人物がいる。 学園長は甘いところもあるけど、腹黒いからね。 使えるモノは使おうとするだろう。」

ハア・・・ 何に使うんですか？

「日本有数の霊地であるこの土地そのものや、多くの貴重な魔道書が保管された図書館島、あの世界樹『蟠桃』などが狙われていて、襲撃者が絶えず侵入を図ろうとしているんだ。 それを防ぐために、

主に立派な魔法使い（マギステル・マギ）、所謂正義の魔法使いを目指している魔法先生や魔法生徒といった魔法使い達が夜に警備員として防衛しているんだ。本国から派遣もしてもらっているんだけどまだまだ人手不足で、有能な人材は常に求められているんだ。」

・・・すみません。正直に言わせてもらおうと、その話を聞くだけで色々突っ込みたいんですけど・・・

「ん？ 何だい？」

え〜つと、じゃあ、なぜ襲撃するところに一般人が生活する場をつくったんですか？ でっかい公園つきの博物館とか美術館とか建てて夜だけでも一般人入らないようにしたらよかったんじゃないですか？

「ははははは、そうだね。守るだけならそれでもつとやりやすかつたかもね。でも、おそらくは他の、そう例えば魔法を習う子供達がいってもおかしくない環境をつくろうとしたんだろっかね？」

ああ、なるほど。じゃあ本国ってどこなんですか？

「ああ、分からないよね？ この世界とは違う魔法世界、まあ異世界がそんざいして、そこにあるメガロメセンブリアって国がこの麻帆良の上部組織なんだよ。まあ、上司と下っ端の関係といえればわ

かりやすいかな？」

あれ〜？ 疑問がさらに増加したんですけど！？ これ、いつまでも疑問が尽きないような・・・

えっと、なんで先生や生徒、特に生徒が警備してるんですか？

「日常で正体を隠していたり、人手不足っていうのもあるだろうけど、正義の魔法使いとなるための試練みたいな感じかな？」

だめだ！ 私には理解できない世界だ！

突っ込んじゃだめだ、なんで朝昼働いて夜も働いてんだよ、とか突っ込んじゃだめだ！ いつまでも終わらない。

え〜、あ〜・・・じゃ、じゃあ、最後に、立派な魔法使い、正義の魔法使ってなんですか？

「それは本国に実力の認められた魔法使いが名乗れるようになるんだ。世のため、人のために陰ながらその力を使う、魔法世界でも尊敬される仕事の一つだよ。こういうのは誰かの許可がいるものじゃないとは思っているんだけどね・・・ 正義正義ってうるさい人が多いから気を付けた方がいいよ？ 絡まれるから。」

し、ししょーは他の人とは考え方が違うんですね？

「うん。俺はこの世界で育ったし、流れで魔法使いになったところがあるからね。・・・ガキかよって思っちゃうんだよねえ。」

「う、うわっ！」

はあ・・・ま、先のこととは置いて・・・自分のことを何とかしましょう。

今のままだとまだ爆弾みたいなもんですもんね・・・

「おっい。どうした？」

なんでもないですよ。

第十話（後書き）

ありがとうございました。

番外編 2 (前書き)

千雨に魔法のことを話して数日後の帰り道での話です。

番外編 2

・ある日の下校中

「そういえばしょーくん。何で私達だけ皆と違って一般常識を持っていたんですか？」

「「は？」」

学校が終わり、いつもの三人で下校していると、緋音がふと思い出したように翔に疑問を尋ねる。

周りにはちょうど人が少なく、大声で話さなければ誰にも聞こえない。

すると、翔だけでなく、千雨まで足を止めて「何言ってるんだこいつ」という反応を返した。

「な、なんですか？ その反応は？」

「いや、私より先に事情（魔法のこと）を聞いていたのに何で知らないんだよ？」

「そつだ、千雨に説明したときも言っただろうが。」

「聞いてませんでした。」

「（怒）・・・はあ、ダメだこいつ。」

「何で気にならなかったんだよ？」

「だから、今気づいたんじゃないですか。」

「「遅いわ！」」

ドンツ！と二人の同時ツツコミが緋音に炸裂する。

翔が緋音の耳元に口を近づけて周りに聞こえないよう注意する。

「いいか。麻帆良には結界が張ってあるんだよ。主な結界の効果は、

二つ。魔物の弱体化と強力な認識阻害だ。この認識阻害が一般人に危険を危険と思わせなかったり、不思議なことも不思議に思わなくさせてるんだよ。」

「え、危なくないですか、それ？」

「やっぱりそうだよな。緋音の影響かあの時はあんまり気にしなかったけど（一度に大量に教えられたしな）。」

「あ、でもそれがないとあの世界樹とか図書館島とかの異常さが麻帆良の外にまでばれて不味いんだよ。魔法使いの仕事にも影響するから・・・」

そのように三人で寄り合って話していてもちゃんと周りに誰もいないことに気を配っているようだ。横断歩道に近づいた時も青信号に変わったことを確認してから渡ろうとする。

その時、車が一台こちらに突っ込んできた。どうやら信号が変わったのに、スピードを上げて無理やり突っ込んできたようだ。

三人の姿はちゃんと前を見てれば確認できただろうに、ブレーキをかけても間に合わない距離になってからドライバーは彼らに気づくそれにいち早く気づき、反応できた翔が二人をひつつかんで後ろの歩道へと戻るように跳ぶ。緋音の手から傘がとび、二人とも目を白黒させている。

車は自分たちのいたところを少し過ぎてから止まった。

そして、ドライバーが下りてきて言う、

「おい、嬢ちゃんたち、大丈夫か。ごめん、ごめん。」

「「な・・・！」」

千雨と翔が憤るが、緋音が二人の手を掴み、俯きながらも翔と千雨を止める。

「っ・・・緋音！」

「・・・・・・・・」

「じゃあ、嬢ちゃんたちも気をつけるよ。」

緋音は頭を横に振ることで翔を再び止める。

そして、ドライバーは自分のしたことに反省の色が見えず、それどころかこちらにも注意して、発車させて行った。

「緋音！ 何・・・・・・・・」

千雨と翔が緋音に詰め寄るが、緋音の様子に言葉が詰まる。

彼は歯を食いしばり、己の感情が高ぶるのを必死で耐えていた。

怒りで精霊を暴走させないためか、または相手が先ほど話していた認識障害の影響を受けているからと納得させようとしているためか、身を震わせて耐えていた。

翔も千雨もそんな緋音の姿に何も言えなくなる。

そうやってしばらく彼らの間で沈黙が続く。

周りにいた何人かの通行人が話しかけてくるが、目の前で子供が事故に遭いそうだったとは思えない反応である。

「ふう・・・帰りましょうか？ 皆さん、私たちは大丈夫ですよ。」

「心配どうも。」

「（緋音・・・）そうだな、帰るか。」

「（はあ、こいつは何で昔からこう・・・）了解。またどこかに遊びに行こうぜ。」

そうして彼らはそれぞれの家へと帰って行った。

さっきのことを忘れるように、次はどこへ遊びに行こうか話し合い、雑談していた。

「やっぱり認識阻害っていいですね？」
「うん。」

番外編 2 (後書き)

ありがとうございました。

第十一話（前書き）

再び時間が跳びました。

第十一話

あれからも私たちは順調に成長し、背も伸びました。

私は、相変わらず日に当たることができなかつたので、肌は白くて無駄にキメ細やか。筋肉がつきにくい上に、そんなにハードな運動はしているので体は細いです。

髪も伸び、邪魔になつて切ろうとしますが、両親（「せっかくキレイなんだから！」、「そうだぞ、おもs・・・かわいいのに！」）+ 千雨ちゃん（「ダメだ！もつたいないだろ！」）の妨害に遭い、伸ばしっぱなしで、女の子見たいです。

外を歩くと、「かわいい」「キレイ」「美少女」「ま、まさか男の娘！？」とか言われるのにももう慣れました。

ただ、女性の（妬みとかの）視線には慣れません・・・

千雨ちゃんに魔法のことを話してからも、色々大変でした。

図書館島で迷子(？)になってた子が私にお礼を言いたいとのこと
で、会いに行けば、かわいい女の子の知り合いが増えました。

こんにちはー！ あの時はお互い災難でしたね？

ごめんなさい、咄嗟に突き飛ばしちゃって。大丈夫でしたか？

あ、よかったです。お礼？

いいですよ、女の子を守るのは男の務め・・・え？ ああ、私これ
でも男なんですよ。

どうしました？ あのだい・・・何で気絶！？

・・・かわいい。

はっ！ ち、千雨ちゃん落ち着いて！ 落ち着いて話し合いましょ
う？

いやO・H A・N A・S H Iって、それ肉体言語では！？

しよーくん、そこの御嬢さんたち、た、助けt・・・

また、ある時は、忘れられない思い出ができました。

いったい何ですか？ 撮影会？

・・・前もしましたよね。

記念になる？ そりゃ忘れられそうにありませんがね!？

くっ、千雨ちゃんは？

だめだ、こっちにフリフリの服もって迫ってくる!

こうなったらしょーくんだけでも・・・逃げやがったなあんにゃろ
う!

っ、捕まってたまるもんですかー!

魔法、というより魔力操作の訓練では新たな発見ができました。

えっと、自分の中にある魔力だけを動かして・・・

こう？ こうですかね？

あ、自分に魔力を流して強化できるんですか？

じゃあ、目に流れるように直結してみると遠くの物が・・・

ぎゃー! め、目がああああ!!

サングラスかけてるのにまぶしいです！何か小さな光みたいなのが大量に見えます！

あ、これが精霊ですかね？

魔眼？

何それ怖い。

他にも遠出してハプニングが起きたり、自身の能力を抑えるのに四苦八苦したり、学園長が私のことを期待していたり、新しい出会いがあったり、千雨ちゃんが暴走したり、心友の特訓につきあったりとドタバタした毎日でした。

桜が咲き誇り、春の暖かな風が眠気を誘う、よく晴れた日のことです。

今日は中学校の入学式です。

今日から男女別に分かれた学校で、入寮して過ごすこととなります。

お母さんは「早く帰ってきてね。」と心配し、お父さんは「気をつけるよ、特に周りに襲われないようにな？」と笑いながら見送ってくれました。

もちろんお父さんにはお母さんからの鉄拳制裁が下されました。

ただ、その時の「シャレにならないこと言っんじゃありません！」って言うことは、お母さんも理解してるんですね・・・

周りを見れば男男男、女性は先生の中にちらほらいますがほとんどが男のそんな集団の中に私　サングラスをかけ、日傘を常備しているアルビノの男の娘　はいます。

メッツツチャ見られています。

他の小学校から来た子や先輩も大勢いるので物珍しいのでしょう。

ジロジロこちらを見ってきます。

怖い、怖いです！　何が怖いって一部が息を荒げてこっちを血走った目で見てくるんですよ！？

しよ、しよーくん、ヘルプ！　ヘルプ！

逃げないで！　私を置いていかないでー！

離れて歩こうとする我が心友の腕を片手で抱きつき、逃がすまいとすれば、周りの視線に黒いモノが混じって重圧が増えました。

「は、離せ！　今の状況でそれはヤバイ！」

ダメですー。 逃がしませんー。 死なばもろともですー。

はあ、癒しが欲しい・・・

第十一話（後書き）

ありがとうございました。

第十二話

さて、今私は1-Cの教室の一番目の当たらない廊下側の一番後ろの席に座っています。

本来なら出席番号順で座るんですが、私の体質を鑑みてこの席を指定されたみたいですね。

今度はこの席で一年過ごすんですね。

翔君と同じクラスになったのはラッキーでした。

あんまり親しい人いませんでしたからねえ（いじめの件とかで近寄りかかったから）……

あれ、目から水が……

入学式が終わると、新入生は言われた通り、あらかじめ張り出されていたそれぞれの教室に入りました。

これから先生からの挨拶や連絡、軽い自己紹介、教科書の配布などが行われるようです。

今はその先生を待っている状態なんですが、周りを多くの野郎どもに囲まれています……

「名前は？」「どこから来たの？」「男だよな？」「外人？」「日本語わかる？」「なあなあ、なんでサングラスしてんの？」「何で髪白いの？」「長袖暑くない？」「ずっと前から好・・・」「スリサイズは・・・」「俺とつきあ・・・」「てめえら！ 抜け駆けすんじゃねえ！！」「」

ぐああああ、煩い！ 暑苦しい！ 私は聖徳太子じゃないんだから一度にたくさん言われてもわかりません！

そして、最後の方！ 変なこといいませんでしたか！？ なんで乱闘し始めてるんですか！？

何でついこの間まで小学生だったのに何でそんなに変にテンション高いんですか！？

誰かー、たーすーけーてー！ って、誰も知り合いいねえー！ しよーくん！？

式の前から異様な雰囲気は感じていましたが、このような状態になるとは！？

恐るべき思春期のパワー！

そうして苦笑いしていると先生がやってきました。

「おーい、席につけ。 さっさと始めるぞ。」

これで助かった！と思いきや、一部の騒いでない男子だけが聞き入れ、私の周りのほとんどの奴らは相変わらず騒いでいます。

避難していたしよーくんもちやつかり座っていやがります。

「は、全く・・・先が思いやられるな。いい加減にしるお前ら！ 初日から手間とらせるな！（ズババババン！）」

「くくくくわっ!? あ、頭がくー!!」「くくく」

騒いでいた全員が頭を押さえて蹲り、転げ回りました。

そして、その背後には左手に出席簿、右手にチヨークを持った鬼がおりました・・・

勇気ある無事だった生徒が先生（鬼）に引き攣りながら質問しました。

「せ、先生？ やりすぎでは？」

「愛の鞭だ。」

また、いち早く立ち直った野郎の一人が、

「先生！ 愛を感じません！」

「じゃあ、教育的指導だ。」

()()() (じゃあ!?) ()()()

「指導なら言葉で「肉体言語だ。」……」

()()() (それ言葉じゃねえ!!!) ()()()

「早く座れ。 なんならもうい……」

ズザッ!!

先生が言い終わるより速く、痛がっていた野郎どもは各々の席に着席し、シーンと静まり返りました。

「よし、俺がこのクラスを担当することになったみやま深山 たかみ高海だ。 さっきみたいにあんまり迷惑なことするなよ? やるならばれないようにしろ。」

()()() (だめだ! この先生!) ()()()

「後、その白い奴はアルビノで、日に当たらないようサングラスとか日傘とか差すらしいが、変なちよっかいかけないように。 じゃあ自己紹介でも……」

そうして、連絡なども終わらせると先生は帰っていきました。

個性的な先生でしたね? もう誰も逆らわないでしょう。

先ほど騒いでた皆さんも私に理解を示してくれたみたいで、うれしかったです

中には同じ小学校の子たちもいて、話しかけてくれたりしました。

「騒いで悪かったな？　これからよろしく。」「お前アルビノなのか？　っていうかアルビノって何？」「馬鹿だな、いいかアルビノってのは・・・あれ？　何だろ？」「何か手伝えることがあれば言ってくれよ？」「友達になるうぜ？」「今日から同じ寮に住むんだよな？　よろしくー！」「今まで敬遠しててごめん。」

あはははは、皆さん、私見た目がこんなんですけどよろしくお願ひします。　基本的に日に当たらなければ大丈夫ですので。　残念ながら外で一緒に騒げないですけど・・・

いやあ、クラスの皆さんはいい人ばかりですね？　これからの学校生活は今まで以上に楽しくなりそうです！

今日から私たちが寮に住むですよ。　しよーくん、楽しみです
ね？

あれ？　何だか乗り気じゃありませんね？

はあ？・・・ああ、今日から夜の警備に出たりするんですか？
大変ですね？

何とか中学校まで待っててもらってたんですね？

頑張ってください！　しょーくんなら強いですから大丈夫ですよ！

え？　いや、私は魔法生徒じゃありませんから！

私が争い嫌いなへなちよこながよく知ってるじゃないですか？　いや、確かに精霊さんたちにお問い合わせすれば割と何でもできますけど・・・

これを機につて、巻き込む気満々ですか？　逃げるだけならできそうですのでこれ以上強くなるうとは思っていませんよ？

だいたい、魔法唱えてみたらしょーくんとししょーが禁止したじゃないですか？　無理に従わせて命令するみたいで嫌いです・・・

おっと、新たな生活の場にとっちゃくっつと。

立派で大きいですね。　ほとんどの家具もそろっているらしいですし。

荷物は送ってありますし、部屋割りを確認しに行きましょう？

そうして、私たちは寮の中に入り、玄関ホールに張り出されていた部屋割りに従って移動します。

しょーくんとは一緒に、学年ごとに階が決まっているわけじゃなくて、卒業して空いた階の部屋に入るみたいでした。

どうやら私たちは三階の奥みたいですね。

今日は新入生歓迎パーティーがあるみたいで楽しみです。

・・・パーティーではまたもや私が目立ってしまいました。

後、何人かの生徒が私をみて顔を赤くしたり、写真を買っていたのは見なかったことにします。

いちいち気にしてられません。 慣れました！

いや、慣れるべきではないんでしょうけど・・・

第十二話（後書き）

ありがとうございました。

第十三話（前書き）

PV28、866アクセス ユニーク4、138人 と知ってピ
ツクリした怠けMONOです。

のんびり書いていこうと決めた矢先に、これでしたので、あわてて
続きを書きました。

これからも、よろしくお願いします。

この小説は、私視点で固定しているので、翔や他の視点の話は番外
編などですれ暇があれば書いていきます。

第十三話

賑やかなパーティーが終わり、私たちは部屋へ戻りました。

いや〜、すごかったですね！

先輩達も楽しい方々でしたし、昔ながらの伝統とかがまた趣ありますよね〜。

あっちこっちから部活の勧誘とかされましたけど、何故か乱闘に発展していましたね？

「俺たちの部に入るんだ！」「ウチのマネージャーだ！」「てめえら、何抜け駆けしてんだ！」とか聞こえてきましたけど、私って女の子扱いですか？

他の冷静な格闘系とか運動系の先輩が抑えにかかって、何人かが宙に舞っていたのは突っ込むべきなんでしょうか？

・・・陰で私を睨んでいたり（「私の方が可愛いんだから！」）、熱っぽい視線を向けていた人（「やらないか？」）は無視します。

あれはダメです。冗談じゃなく、絶対越えちゃいけない一線超えた人たちですよ。マジで。

いかん、また寒気が・・・

これからしばらく住む場所なのに、気が休まらないとはどういっ

とでしようか!?

部屋に戻ってしばらくしよーくと荷解きの続きをしたり、話したりしていると、しよーくんの夜のお仕事時間になったようです。

「じゃ、そろそろ行ってくる。おっと、やっぱり緋音も来ないか？ 言い忘れてたけど、学園長と一緒に来いって言ってるみたいだな。」

嫌です。前にも言ったように魔法生徒にはなりませんよ。

それに、その集会に行ったら、私が何を言おうが、魔法生徒扱い確定でしよう？

「まあな。」

そう苦笑いして、しよーくんは出掛けて行きました。頑張って下さいね。

さて、私もしなければいけないことをするつもりでしょう。

まずはどんなトラップを張るかですね。精霊さんにもお願いしましょう。

ああ、お母さん。あなたの心配は的中しました・・・

いつの間にか荷物に入っていた痴漢撃退セットは有効活用させていただきます。

そして、お父さん。 家に帰ったら殴らせてください・・・

あなたの言葉はシャレになりませんでした。

翌日の朝、しよーくんは大きな怪我もなく帰ってきたようで、すやすやと眠っていて安心しました。

食材を買って置くのを忘れていたので、今日は近くのコンビニでもよって買い物することにしました。

そうと決まれば、しよーくんを起こして早めに出掛けるとしましよー！

しよーくん、起きてください。 朝ですよー！

「ん・・・あ、ああ？ 緋音か・・・ おはよう。」

おはようございます。 しよーくん顔を洗って着替えてください。

今日は早めに出ますよ。

「ん？ 何で？」

昨日食材を何も買わなかったからですよ。コンビニにでもよって行きましょう？

「ああ、そうだったな。 帰りに買ってこないとな。 食材だけじゃなく他のも。」

そうですね。 どこか安くていい所探しませんかね。

そうして、私たちは早めに登校しました。

登校中の雑談として、（周りに人が少ないため）昨夜の集まりについて聞いていました。

最初のお仕事はどうでした？ 鬼退治でもしましたか？

ありゃ、顔合わせと軽い手合せしただけですか。 ちなみに、誰と？

へへ、高校生の先輩とですか。 金髪美人の影使いで、何か派手で正義正義うるさいんですか？

あらら、それはしよーくんと相性悪そうですね。 性格的な意味で。

適当なところで負けたんですか？ 強かったんですね？ 全力でもよかったのでは？

ああ、そうですね。 ししよーにも使われないように言われていますし、

後が面倒そうですね。

しよーくんもししよーもそこらへん割と適当ですよ？

あら？ 私の影響もあるんですか？ そりゃ失礼。

へ？ 学園長が放課後に来いつて？

無視ししちゃ・・・ダメですよ。

絶対厄介事ですよ？ 憂鬱です・・・

あ、コンビニ発見！ 何食べましょうか？

授業は、テンションが高くなりすぎたり、不真面目な生徒を手際よく鎮圧することで着々と進みました。

それぞれの先生が手馴れた感じで対処していたのが印象的でした。

そして放課後、私は多くの女子中学生にジロジロ見られながら、一人で学園長室へと向かっています。

しよーくんも道連れにしようとしたんですが、買い物してくると言うて逃げられました。

逃げ切られる前に買い物追加メモ（トラバサミ、警報装置など）は何とか渡せました。

憂鬱になった私の様子を見て声をかけてきた男子の質問に答えると、「うわ、そりゃ勘弁!」「俺でよければついていこうか?」「いや、俺が!」「俺に任せろ!」「それより、女装をした方が・・・」「白峰の女装!?!」「いいね!」「カメラは任せろ。」「いや、シャレにならんだろう。」「

まともな意見が少ないですね・・・

とりあえず、その場はお礼を言って一人でここまで来たんですが、女装を推した人、あなたの意見を採用した方がよかったかもしれない。

キツイです。昔来たときはししょー（主に視線が向けられていた）がいましたし、私も子供でしたからね。

「あんな子いたっけ?」「キレー」「あれ?でも男子の服着てるね?」「ホントだ!・・・どっち?」「どこかで見たとかな?」「ああ、あの子か。」「何でいるんだろ?」「

とかここでも聞こえてきますね。

まあ、私も派手な部類ですし、麻帆良の中でも中々いないタイプですからね。

なかには私に注意してきた子もいて、学園長に用があることを告げると納得していただいたんですが、

「ちょっと、あんた男(？)よね？　ここは女子中よ！　帰りなさいよ！」

ここまで攻撃的な人はいなかったなあ……

思わずため息をつきたくなった私の背後から、活発そうな声を荒げて誰かが近づいてきました。

「その傘差してるあんたよ！　聞いてんの!？」

ああ、すみまっつて、うわ！

か、傘はとらないで！　引っ張らないで！

今日(めっちゃ晴れ)はマズ、ダムちょっと、離してー！

私が抵抗したためか、向こうも意地になって傘をより強く掴み、ちよっとした騒ぎになりました。

相手と一緒にいたらしい女の子と、たまたま通りがかった元クラスメイトの子達が駆け寄って間に入ってくれなかったら、混乱涙目状態の私と熱くなった彼女の間で傘の綱引きがまだ続いていたでしょ

う。

本当にありがとうございました。

「う、ごめんなさい！」

「ごめんな。アスナあわてんぼやから。」

いえいえ、怪しい人を警戒するのは仕方がないと思いますよ？

手加減してほしかったですけど……

「うっ！ わ、悪かったわよ……」

バツが悪そうに謝るのは赤い髪をツインテールにしたオッドアイの女の子で、隣にいる女の子は黒髪でポワポワした感じの女の子です。

うん、目の保養になりますね！ ラッキーかな？

「ここに男の子おらんからなあ。それに……」

ああ、言われずともわかっています。

私は体が弱くてですね、日に当たれないんですよ。

「どこか悪いん？」

体質ですね。私、アルビノなんです。

「あるびの?」

「アスナ・・・」

ふふ、私はメラニンが作れない体なので・・・そうですね、簡単に言えば日に当たると病気になるやすいんですよ。

だから、こうしてサングラスや日傘で守ってるんです。ああ、そんな落ち込まないで！ 悲しまないで！

・・・こほん。まあ、気にしないで下さい。

「でも・・・」

そこまです。すみませんが、用事がありますので失礼します。

気にしないでくださいね〜！

後ろでまだ何か言っているようですが、ああいうのはこっちが話を切った方が早いです。

いつまでも学園長を待たせるのも悪いですし、何だか攻撃的な視線がどこからか刺さってきます。

即、この場から逃げるに限ります！

もうこれ以上のトラブルはごめんです！ フリじゃありませんよ!??

第十二話（後書き）

ありがとうございました。

第十四話（前書き）

すみません。描写を増やそうとは思っていましたが、会話を書くのが面白くて会話中心になりました。

会話を書いてたら切るのがもったいなくなっただけで、後回しになった上に量が書けませんでした。

やはり駄目作家なのかな。

第十四話

途中、何人かの先生に呼び止められました。が、学園長に、と言いかけてだけで納得されたのは信用されているからなんでしょうね。

無論、悪い方ですが。

頻繁に来ていないのに、忘れないですんなりたどり着けたのは、やはりあの学園長のインパクトが強いからなんでしょうね。

先程の出来事の後なので、もうこれ以上は厄介なことにならないとうれしいな……（諦めてる）

さて、相手が学園長だとしても礼儀は必要なので、来訪を知らせます。（文法が変ですがきにしません。）

麻帆良男子中学校一年生の白峰です。　学園長はいらっしやいますか？

「入って構わんよ。」

返事が返ってきたので、私は覚悟を決めて入室します。

失礼します。　今日はどのような用件で呼ばれたのでしょうか？

学園長の近くには（デスメガネと恐れられ、麻帆良？2の実力者だとか言われている）高畑先生が立っていました。

ああ、早くも後悔しそうです。 いや、たまたま居合わせただけかもしれない！

「ふおふおふお、今日来てもらったのは昨日の夜の会合についてなんじゃが・・・」

あれ？ もしかして脅し要員ですか？ 場の空気がピリピリします。

「なぜ来なかったのかね？」

上から目線ですか、この野郎。

私はあなたにどのように認識されているんですかね！

聞いたらこの中学校ぶっ飛びそうですね。 落ち着け、私は大人ですよ・・・よし！

私は魔法生徒でもありませんし、体が弱いんで無理して行く必要を感じなかったからです。

問題がありましたでしょうか？（笑顔です。 それはもうにこやかに！）

「ふむ、確かに。　じゃが、君も魔法に関わる身じゃ、魔法関係者に知らせておくのは悪いことではなかるう？」

関係者の皆様と会ってまで知らせる必要はないのではありませんか？

私のことは森里先生が見てくれますし、私のように魔法があることを知っている人は他にもいると思いますが？

「確かに魔法関係者以外にも知っておる者はおるが、お主は魔法を使う側じゃろ。　それに、精霊に・・・」

学園長。

何がおっしゃりたいんでしょうか？　（我慢、我慢です！）

「正式に魔法生・・・」

いやです。

おっと、一瞬静かになりましたね。

ピリピリした空気も緩くなりましたね。

「ダメかのう?」

気持ち悪いです。

何ぶりっ子ぶってほざきますかこのぬらりひょん。

前々から断っている内容じゃないですか、全く時間を取らせておいてそれですか?

よし、帰りましょう。

隠れてる誰かさんもいますしね。

なにせ中学生の制服を着た金髪幼女ですからね。

さわらぬ神に何とやら〜ってね。

それじゃあ、失礼しますね。

「待つてくれないか。」

高畑先生、何でしょうか?

ポケットに手を入れて、戦闘でもするんですか?

「そうじゃないよ。ただ、何故魔法生徒になつてくれないのかと思つてね。」

学園長めらりひょうんから聞いてませんか？

私は争い事が嫌いですし、体が弱いので戦闘なんてとても無理ですよ。

魔法を習って、どんどん使って、強くなりたいんだーとか思いませんし。

それでも、正義のために戦え、とか言うんですか？

「友達を守るうとは思わないのかい？」

餅は餅屋って言うじゃないですか。

それに、手が届く範囲で私にできることは勝手にしますし。

そうだ、昔から言いたかったことあるんですけど、いい機会ですし、言ってもいいですか？

「・・・何かな？」

何も知らない人たちを勝手に巻き込んで正義面するな、反吐がでる。

きゃく　　言っちゃいました！

すっきりしますね！

それでは怖い人たちが睨んでいるので早く帰りましょう。

それじゃあ、失礼しました。

ああ、千雨ちゃんに会いたいな。

抱きついたら・・・ぶん殴られますね。

ひゃー、それにしても麻帆良Top3が勢ぞろいですか。

怖い怖い。

一人は吸血鬼、一人は英雄、一人は妖怪、ってまともな人がいませんね。

ああいった人たちに狙われたら、どうしましょ？

さすがに人間やめるともう絶対に魔法から離れられませんしね。

適度に精霊さん達にからかってもらって逃げるに限りますね！

ま、それも逃げられるなら、ですが・・・

私が寮に帰り、部屋についた時にはもう空は暗くなってしまいました。

しよーくんには一人で買い物させてしまったので申し訳ないですね。

ただいまー！

「おかえり。食材とか適当に買ったぞ？ それと、お前の追加メモは破り捨てたから。」

酷いですね！？ あれ、結構本気で欲しかったんですが！

私の精神・肉体の安全を守るには必要なですよ！

「あんなもんあるわけねーだろ！ 欲しけりゃ専門店で買え！」

む、こうなれば千雨ちゃんにお願いしてみよう！

「千雨に？ ああ、あいつパソコン持ってるんだっただな。」

そうですね。さすがにパソコンは持ってませんからね。

以前千雨ちゃんのパソコン見せてもらったら、私のコスプレ写真が大量に保存されててびっくりしたんですよね〜・・・

「俺も見せてもらったぜ。なかなかよく取れてたよな。」

はいはい、もうそれぐらいじゃ怒りませんよ〜。

それに今日はもう疲れました。あ〜、癒しが欲しい。

「（パチン！）昨日のことか？ 魔法生徒になれとか？」

どっちもです。

学園長室に入ったら妖怪一人と英雄一人がいて〜・・・

「（妖怪 学園長、英雄 高畑先生？）よく何もなかったな？」

ロリっ子吸血鬼が隠れてて〜・・・

「（ロリっ子吸血鬼 ！？）え？ もしかして闇の福音！？」

話聞いてたらむかついたんで、正義面すんな！って言って帰りました。

「お前何してんのー！？」

しよーくん、近所迷惑ですよ？

「とっくに防音の結界はかけてる！ それよりも、お前が厄介事の種蒔いてきてるじゃねえか！」

そうだ、今度は千雨ちゃんも誘って一緒にあそびましょ？

「話聞けよ。」

ああ、楽しみですね。とりあえず、夕食でも作りましょう。何でもいいですよ？

「何でもいいけど・・・ああ、現実逃避してんのか。かわいそうに。」

お料理もたーのしいーな！。

翌日、千雨ちゃんに携帯で連絡し、放課後に出掛けることにしました。

私たちが千雨ちゃんを迎えに行き、どこかでデザートまたは甘味を食べにいきます。

しよーくんは渋っていましたでしたが、すがってお願いしたら（周りの男子に睨まれて）快諾してくれました。

いやー、持つべきものは心友ですね！

「お前は死んだら地獄だろうな。」

私は天国ですよ？

そんな嫌味言つてないで、千雨ちゃんを驚かせに、もとい迎えに行きましょう！

「千雨もかわいそうに、明日からかわれるんじゃないかねえか？」

怒った千雨ちゃんもかわいいですからね！ それに久しぶりですね。

「ああ、いつの間にか付き合いが悪くなることがあったな？ あの図書館島トリオと遊んでたのか？」

それもあつたでしょうけど、趣味ができたんじゃないですか？ コスプレとか？

「コスプレえ〜？ 千雨が？」

何ですかその態度。千雨ちゃんかわいいじゃないですか！

「それは認めるがな〜・・・」

私にコスプレさせる衣装を持つてくることもありましたが、私の両親と裏で取引したり、ハルナちゃんと妙に馬が合うときとかがありましたから、きっとそうだと思いますよ。

「お前はよく見てるな。　やっぱり千雨が好きなのか？　それとも宮崎か？」

ああ、恋バナですか？　私はみんなそれぞれ好きですよ。

しよーくんは？　結構モテましたよね？

「いや、確かに何人かそういうのはいたが・・・っておい、お前の話だよ。」

あ、千雨ちゃん発見！　のどかちゃんたちもいますよ。

「ちっ！　時間切れか。」

全く、しよーくんは長い付き合いのせいかどこか勘が鋭いです。

私のこの性格が仮面みたいなのになにうすうす気付いてるでしょうね。

ま、私が目覚めた時から外見に合わせて気を使ってましたし、いまさら素の付き合いなんてできません。

それが原因なのか、魂と肉体が噛み合わないのか、妙なズレがありますし・・・

未だに夢の中で生きているかのように感じている私に、恋愛とか無理です。

しよーくん。

「ん？」

ありがとうございます。私と一緒にいてくれて。

「気にすんな心友なんだろう？」

はい。

こういう奴が友達になったから、この現実（夢）も悪くないと思えるんですよ。

・・・ま、今から目を背けるのは一旦ここまでにしましょう。

そんな心友に一つ聞きたいんですが？

「なんだ？ 恋バナの続きか？ 周りの視線か？ 千雨が怒ったか？」

いや、そうじゃなくてですね？

警戒というよりも、攻撃的な視線を感じるんですが？

「俺らが？」

私だけが。

「知らん。 周りの誰かの嫉妬か？ お前のお友達（精霊たち）に

探してもらえよ。」

あんまり日常で頼るのは好きじゃないんですー！。

それに嫉妬つて、私が綺麗といたいたいんですか？ それとも自分がカッコいいって言いたいんですか？

どちらにしろ私が女扱いなんですね、我が心友？

とりあえず原因が分からないと千雨ちゃんたちと合流する、の、わー！

「なんだ？ 気でも狂ったか？」

何でそんなに冷たいんですか！

「こんなところに（女子中の近く）来たせいで周りの視線が痛いんだよー！」

すみませんでした！ いや、違います、思い出しました。

「何を？」

いや、この視線ですよ。

昨日学園長室に行く途中でオッドアイのツインテールの子と黒髪の大和撫子的な子と話していたら、こういう視線がどこから刺さってきたんです。

あ、ついでに機械的な視線と面白いモノを見るような視線、怒りの視線とか複数増えました。

「お前はそんな細かい視線の違いがわかるのか。人間視線探知機め。」

褒め言葉ですか、ありがとうございます。

私はしょーくんから視線を外し、先ほど千雨ちゃんたちを見かけた階段の方向を向きます。

階段中ほどに、怒っている様子の千雨ちゃんや戸惑ってる感じののどかちゃん、煽ってるハルナちゃんと夕映ちゃんがいますね。

あ、やっぱり千雨ちゃんだ。

「本当だな。……ついでに緑髪ロボットと金髪幼女も遠くにいるな。」

はい。

「逃げるか？」

逃げましょう。

さすがに走って逃げられなかったのでも千雨ちゃんに追いつかれ、怒られていた間にのどかちゃんたちもやって来て、しょーくと話しています。

「聞いてんのか!」

はい! 聞いてます!

あれ? デジヤブ?

第十四話（後書き）

ありがとうございました。

第十五話（前書き）

とりあえず続きを書いてみました。

第十五話

千雨ちゃんを驚かせに行ったはずが、逆にひどい目にあっている緋音です。

多くの女の子が帰宅しようとする中、千雨ちゃんに捕まった私たちは近くの影に引っ張られ、何故ここにいるかを話すとお説教（地面に正座）が始まりました。

「恥ずかしいことするな!」「朝倉に見つかったらどうしてくれるんだ!」「翔もちゃんと止めるよ!」「いいわけすんじゃねえー!」といった言葉を私としょーくんは時々肉体言語交じりで頂きました。

でも、何気に私を気遣って影に連れてきた千雨ちゃんはやさしいですね。

ツンデレ?

「ツンデレじゃねえ!」「バチーン!

へびっ……!

ち、千雨ちゃん、落ち着きましよう!?

いくらここが陰になっているからって、他の人たちにも聞こえますよ!?

「お前の悲鳴が?」

何怖いこと言ってるんですか!?! しょーくんも千雨ちゃんを止めてくださいよ!

・・・って、あれ? 俯いて肩震わせてますね?

千雨ちゃん、どうかしましたか?

「(ボソツ) 久々に会えると思って楽しみにしてたのに・・・」

ん? 千雨ちゃん、今なんて言いましたか?

あれ? しょーくん、なんで静かに素早く私たちから離れるんですか?

自業自得? 地獄に落ちろ?

いや、だから私は天g・・・

「馬鹿　！！」　バツチーン！！

・・・・・・・・！！？

・・・グーじゃなくてパーだったのが千雨ちゃんなりの優しさだったと思うことにします。

それと、後ろの心友。　黙祷するな。

そんな私たちの騒ぎを聞きつけたのか、のどかちゃん、ハルナちゃん、夕映ちゃんの三人が私たちと合流しました。

赤く頬を腫らして意識のない私とそんな私をため息交じりに介抱するしょーくん、涙目で二人を睨んだり心配したりする千雨ちゃんはさぞ奇妙な組み合わせだったことでしょう。

教室では、千雨ちゃんがどこか嬉しそうにしていたのを、ハルナちゃんがからかったりしていたそうですが、実際に会えば修羅場（？）

が発生していたんですから……

のどかちゃんは「え？ え？」と狼狽え、夕映ちゃんは「何やってるですか……」と呆れ、ハルナちゃんは「ネタ来たー！！」といつて常備している紙とペンで何かを描き始めます。

ちなみに、ある男の娘（ヒロイン扱い）を巡って二人の幼馴染（両方男）が争い男の娘が倒れてしまうBADENDの話らしいです。

しばらくの間混沌とした空間が形成されるも、私が目を覚ましたことで終わりを迎えました。

ん……あれ？ 私は……

「緋音！」

「おお、大丈夫か？ お前ちょっと気を失ってたぞ？」

え……っと、どうしたんですたっけ？

「緋音、ごめん。」

さすがに、千雨ちゃんもやりすぎたと思ったたらしく謝ってくれましたが、私はよく覚えてません、ということになります。

ん〜・・・しょーくん、何かありましたっけ？

「さあな。」

「さあなつて、私g・・・」

まあ、特に問題もなさそうですし、時間ももつたいないですから出掛けましょう、ね？

「そうだな。早くしねえと人気のある店とかもう満員なんじゃねえか？」

「・・・わかった。」

よし、しょーくんも上手く乗ってくれましたね。

さすが、我が心友。

千雨ちゃんもなんとか納得してくれたみたいです。

・・・代わりにしょーくんが何やら睨まれていますね？
通じ合
つてる二人を羨ましがっている

さて、後から来た図書館島トリオ（命名：しょーくん）の方を向けば・・・

のどかちゃんに夕映ちゃんが言い、「やっぱり翔が緋音の最後の難関です！」「のどか、ファイト！」「のどかちゃんは顔を赤くし

てオドオドアワアワしており、ハルナちゃんは手のスピードと妄想がされに加速して暴走しています。

見なかったことに・・・したいなあ・・・

しかし、友達ですし、放っておくわけにはいきません。

そして、下校中の何人かがこっちを気にして見てはすぐに目を逸らして帰っていくのを見てしまいました。

思わず、視線をしょーくと千雨ちゃんに向けると、千雨ちゃんがしょーくんの襟を掴んで前後に揺さぶっていました。（翔がさつきのお返しに千雨をからかう　千雨がキレる）

・・・私も、帰ってもいいかな？

私たちは今女子の間で人気の喫茶店『翡翠』に来ています。

明るく楽しいひと時を演出しているこのお店にはオープンテラスもあり、ケーキ類の販売も行っています。

どうやら年齢不詳のマスターとパティシエさんの夫婦が営んでいるらしく、二人の見た目は二十代の美男美女なのに、大学生の娘さん（こちらモクール系の美人らしい）がいるようです。

この名物はコーヒーとシュークリームらしいですが、紅茶や他のケーキ類、軽食も妥協はないようで、学生を中心に連日大賑わいだそうです。

店員さんも男女ともに容姿・実力共にハイレベルの人材ばかりらしく、そちらが目当ての常連客も決して少なくはないとか……

私はオリジナルブレンドのコーヒー（ブラック）と季節限定のケーキを選びました。

限定ってつくくと無性に欲しくなりますよね？

運ばれてきたのは苺のタルト。赤く瑞々しい苺が白く化粧を施され、カスタードと生クリームが苺と苺のビューレの酸味を和らげ、サクサクのビスケット生地と一緒に口の中で甘く溶けていきます。

そして、コーヒーを一口。苦味のなかに仄かに酸味と甘味がある計算されたおいしさが舌に余韻を残し、鼻腔を通して頭へと昇っていく挽かれたての豆のいい薫が私を落ち着かせます。

ふう……落ち着きました。

帰りたい！

「俺の方が帰りたいわ！」

しよーくん、小さく怒鳴るなんてなかなか器用ですね。

でも、明らかに私たちに視線が集まっていますよね？ 居心地悪いんですよねえ。 ケーキとコーヒーは美味しいですけど……

「お前は珍しい格好だが、服を除けばいつものように女に見られるだけだろうが！ 俺は複数の女の子たちとデートするハーレム野郎に見られてんだよ！ 確かにケーキとコーヒーは美味しいけど……」

しよーくんの指した方向を見れば、何人かの男性客がしよーくんを睨んでいます。「リア充爆発しろ」「モゲロ」「くそ！ 何であんな奴が！ あ、ウイトレスさん。今度デートしません？」「」（ガシツ！）てめえ、表出るや！！」「」

少し騒がしくなって人数は減ったものの、やはり視線が私たち（実際は緋音と翔）の方に集まっています。

遠くからジーツと見る人もいれば、近くでチラチラ見てくる人もいます。

女の人小さくキヤーキヤー騒いでる気もしますね。

やっぱり美少女が4人とカッコイイ男の子が集まっているから目立つんでしょうか？

「さりげなく他の人に責任を擦り付けたな？」

他に理由がありますか？

「ほう・・・俺にはかわいい女の子4人と、何故か男の制服を着たサングラスがアクセントになっている美人がいるように見えるがね？」

へへ、そんなグループがいるんですか？

「俺らの話だろうが。他に似たようなの探すなよ。失礼な奴だな。」

・ いいじゃないですか、少しぐらい現実から目を逸らしても・・・

「俺たちが戦うべきは現実だ。」

顔を近づけ話し合っていた私たちでしたが、ケーキの食べ比べやお話に夢中だった女の子たちが気づきません。

千雨ちゃんが呆れ（またか・・・）、のどかちゃんが顔を赤くして慌てだし（あわわわわ、どうしよう！？）、夕映ちゃんも顔を赤くしつつ何かを確信し（やはり！）、ハルナちゃんがスケッチし始めます（喫茶店でのBLネタの見本！）。

もちろんいつもの反応ですね。

でも、ハルナちゃんの反応で何となく分かりました。

（いつも通り目立つ私）＋（ハーレム野郎 翔？）＋（男装？ いや、男の娘！？）＋（BL：男の娘×男の子）＝店内の関心二人占め

こんな感じですかね？

まさか私としょーくんでBLと見られるようになるとは……………

今までだったら私の女の子扱いだけで済んだんですけどねえ？
制服が無く、ほとんど男とばれなかったから

とりあえずは……………身内の問題から処理しましょう。

ハルナちゃん、ネタに使うなら使用料を請求します。

その後は、私もケーキの食べ比べに参加しては女の子二人ほど赤面させて一人に殴られ、しょーくんに「あぐん」を試してみたら周りの人もすごい食いついてきて止めるに止められなかったり、夕映ちゃんを中心に図書館探検部の活動を聞いたり、楽しく過ごしました。

そろそろ帰ろうかという話になり、席を立ちます。

もちろん男が払うこととなりました。

「あ、あの、いいの？」

「そうですよ。自分の分くらい払います。」

まあ、友達同士ですからそれでもいいかもしれませんが、久しぶりにこうして集まりましたし……

「男の甲斐性とも思っておいてくれ。」

「あっはっは、男の子も恰好つけたい時があるんだよね。」

「そっぴいじつとじつとてくれ。」

だから皆は先に外で待っていてくれていいですよ？

私たちがそう言って納得してもらいます。

それから店を出て、私たちが女子寮の近くまで送ることにしました。大丈夫だと断られましたが、もう暗くなってきたし、暖かくなってきたから変質者がでるかも、と言ってついでいきます。

結局、のどかちゃんを怯えさせてしまったこと以外は問題ありませんでした。

夕映ちゃんやハルナちゃんに慰めると言われて頭を撫でながら慰めていたら、千雨ちゃんにキレられましたが、問題ではありません。いつものことです。

皆さん、今日は付き合い合ってくれてありがとうございました。

しよーくんは悪いですが、もう少しお付き合いお願いしますね？

「気にすんな。一応、覚悟してたぜ。心友。」

気にしますよ。でも、頼りにしますね。心友。

・・・さて、何の用ですか？

吸血鬼。

第十五話（後書き）

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1159y/>

それなりに上手くいっていた人生でした。

2011年11月15日22時44分発行